

専門家の見解



東京理科大学

池田 憲一

私はもともと構造設計者で、設計実務を経た後、耐火構造の研究と技術開発に従事し、現在、耐火構造を専門とする研究者という位置づけになっています。当協会とは、中間階免震建物における免震装置等の耐火措置が課題となったために発足した防耐火部会の委員になってからの付き合いです。

さて、我が国では構造設計と耐震設計はほとんど同義に扱われています。地震以外の外力に対する設計はどちらかと言うと特別な設計と考えられ、特に火災時の構造設計である耐火設計は、知識としてはありますが、実際に本格的に実施した構造設計者は多くありません。もともと耐火設計の根幹にある耐火構造は建築材料の分野に属し、建築材料の高温特性を扱う材料レベルの分野で、現在の部材レベル、ましてや架構レベルでの挙動を扱うようになったのはつい最近のことです。この分野は日常的設計分野ではないのですが、決して無視できない分野となってきています。私の専門分野は耐火構造で、火災時に高温となった材料や部材、建物の高温時および高温履歴後の挙動についての専門家ということです。全世界的には、火災による構造体の崩壊も数多く発生しており、また、我が国でも火災後の建物の再使用に対する工学的な判断が求められるようになってきましたが、このような分野を専門としている有識者は少なく、私の責任は重いと思っています。

私は、最近、耐火構造の専門家としての見解を求められることが多くなってきています。そのような機会に、どのように見解を述べるべきか、毎回迷うのです。一方、私も専門外の分野については専門家の方々の見解を自分なりに咀嚼して自分の意見を持つこととなります。その時にどのような見解に説得力があるのかを考えるようになってきました。

それでは、専門家としての見解をどのように述べるかです。それは「豊富な知識からなる合理的で的確な証拠を示して、その分野の事象を中立的立場で述べること」だと考えるようになりました。ここで重要なのは、見解は意見ではないことです。一時代前には偉い先生が自分の意見や主義主張を述べ、それがその分野の見解となっていました。しかし、現在はどんな偉い先生が見解を述べても、それに根拠や合理性がなければ社会は納得しないようになってきているのです。大変難しいのですが、専門家は、見解を求められた時、極力、個人の意見は含めないようにしなければならないと感じています。そして、自分の分野以外のことに対しては専門家としての見解を述べたり、判断をしたりしてはいけません。個人の意見を含めた瞬間に、その見解はその価値を失うと感じています。もちろん、自分の分野には自分の意見を持つことは重要で、自分の意見を持っていないのは論外です。また、見解の中には対処方法も含むため、危険性の言いつばなしは無責任で、さらなる勉強が必要となります。一方、恣意的な流れの中で専門家が利用されることがありますが、これに対してはそのような流れを察知し、飲み込まれないようにする必要もあります。最終的に判断を下すのは影響を受ける人々ですが、その判断への影響に対する責任は専門家が持つこととなります。

この記事を読んでおられる方は何らかの分野の専門家であると思います。専門家はその分野の知識と判断力を有しているから専門家なのです。一方、専門家以外の方は、専門家の見解をもとに自分の意見を持つこととなります。従って、専門家は自らの分野に哲学を持ち、新しい知識を求め、絶え間なく勉強し、判断力を磨かなければならないのです。そして、見解を求められた時には、これらの豊富な知識と証拠をもとに中立的立場で状況を冷静に報告するのです。